

平成25年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	瀬戸市立水野中学校	氏名	加藤 篤
-----	-----------	----	------

1. 印象に残る写真2点

● 「空から見た森林の様子」



ビエンチャンからルアンプラバンに向かう飛行機から撮った写真です。国土の8割を山岳地帯で占めるラオス。それなのに森林がどんどん減っている、そんな状況を俯瞰できた一枚です。その後、ラオス森林減少抑制のための参加型土地・森林管理プロジェクト（PAREDD）の専門家の西本さんから聞かされた「焼き畑≠悪いこと」にも繋がり、印象がさらに深まりました。

● 「早朝の托鉢風景」



仏教と共に生きるラオスの人々が、いかに仏教とお坊さんを大切にしているかがよく分かりました。政治上は社会主義ですが、托鉢の入れ物の中には食べ物だけでなくボールペンなど学用品を入れることもでき、お坊さんはそれを使って勉強します。ラオスでは、孤児や貧しくて学校に行けない子を救うセーフティーネットがお寺でした。

2. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

（特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて）

何年か前、「持続可能な開発」について社会科の同僚たちと話した際、「それは無理ではないか？」という意見が多く出た。「本当に不可能なのか？」「我々ができることは何もないのか？」自分が抱いた疑問は払拭されず、それ以来、「持続可能な開発」について興味があった。それについて授業をどう行えばいいのか今ひとつ分からなかった。そんなとき教師海外研修を知った。自分としては実際に現地に行き、持続可能な開発の現場を見ることで自分の認識を変えていけるのではないかと。そう思ってラオスへ赴いた。実際にラオスに行き、現地の人と話し、食事をし、同じ空気を吸うことで、ラオスの人々が大切にしていること、考えていること、願っていることを頭ではなく肌で感じる事ができた。そして一番感じたのはラオスの人々の心の豊かさ。日本と

比較したら物質的な豊かさという点では圧倒的に貧しいこの国には、それを補って余りある心の豊かさがあった。彼らのよさ、この国のよさを持続可能な開発と絡めて授業実践をしていきたい。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

まず、食文化の豊かさについては文句のつけようがなかった。ガイドさんが案内し勧めてくれる食事は何を食べても美味しかった。特にラオス風焼き肉は、ジンギスカンのような形をした鍋？の中央部で肉を焼き、周辺部にスープを入れ、そこで野菜等を煮るという、焼き肉としゃぶしゃぶが一体になったスタイルの料理に完全にハマってしまった。フルーツはどれも美味しく、ホテルやレストランで出されるフルーツはもちろん、庭に生えている何でもない木の実を食べても甘くて美味しかった。食が充実しているラオスでは、食べ物を巡って争うことをしないのだろう、ラオス人の性格は本当にのんびりしていて人がいい。「サバイディー」と声をかければ、ちょっとはにかみながら「サバイディー」と我々に返してくれる。実は、自分はルアンプラバンのホテルに1日分の着替えを置いてきてしまった。『多分、もう処分されているだろうな。』と思いながら、3日後、同じホテルで宿泊した際に受付にいたスタッフに聞いてみると「あるよ〜。」とハンガーに掛かったままで出してくれた。思わず受付の人の手を取り「コブチャーイ！！」と何度言っただろう。その時のスタッフの恥ずかしそうなそれでいて誇らしげな顔は忘れられない。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

市場やナイトマーケットなどでよく見かける、可愛らしい刺繍が入った財布やポーチのちょっとしたお土産。これらはラオスの少数民族であるモン族の伝統的な刺繍だ。ラオスには49の民族が集まった多民族国家だ。その中でもモン族は日本人のルーツの一つだそうで、モン族の子どもたちをよく見ると日本人にそっくりだった。子ども文化センターに行ったときも、「この子、去年の教え子に似てるな〜。」と思えるような子どもがいっぱいいた。ひょっとすると、過去をたどれば自分の祖先もラオスから来た人で、そう考えれば日本と浅からぬ縁がある国なのだと思う。だからこそ日本とラオスは惹かれ合うのかも知れないと感じた。

訪問する先々でラオスのために活動する日本人を見てきたが、「ラオスの国と人に、心から繋がっているな、受け入れられているな。」と感じた。現地の人たちが青年海外協力隊やJICA 専門家の方々を見る目はとても温かく、何かあればすぐにそちらへ視線を移す。そこで青年海外協力隊やJICA 専門家の方々がニコッと笑うと、安心したように視線を元に戻す。時には冗談を言い合いながらコミュニケーションをとっている。そんな姿をあちこちで見ると、この人たちは心が繋がりが合ったパートナーなのだと思う。ただ、日本人は、ラオスの人々が自立できるよう、あくまでラオスの人々をそっと支える役目に徹している。それが日本らしい支援だし、ラオスの人々は日本のやり方を理解してくれているのだと感じた。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

後発開発途上国のラオス。自分は今回の研修を通して、昭和30年代の日本にタイムスリップしたような感覚を持ったが、ラオスは今後、日本が発展したように発展していくことを望んでいるし、それが本来人間のもつ欲求だと思う。ラオスが発展することはよいことなのだが、今までもっていたラオスらしさ（ラオスの良さ）

を失ってほしくないと思う。ラオスが発展しながらも良さを失わないために、日本、そして自分ができることは何だろうかと考えさせられた研修だった。

ラオスが発展していく中で直面する問題。例えば、ルアンプラバンでは、ゴミが市中にあふれてしまい処理に困っている現状があった。そんな時に JICA の支援によってゴミの回収や処理の方法を学ぶことで、ルアンプラバンの人々は解決への手がかりを得ていた。また、ビニール袋の使用量を抑えるために実施されたエコバスケット活動や、ゴミコンポストの設置事業などは、日本人であっても心がけるべき点だと思った。いくら日本に高性能の焼却炉があっても、ゴミ回収の仕組みが進んでいても、ゴミを減らすという根本の問題に日本人が取り組まなければ、世界全体で見たゴミの量はいっこうに減らないだろう。ラオスの人々が取り組み始めているからこそ、我々も日本国内でゴミ減量の取り組みを勧めていく必要があるのだと感じた。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICA の活動で素晴らしいと感じるのは、ハードとソフトの両面から支援をしていること。ラオスの人々が本当に役に立つ支援を継続できるのが JICA の強みだと思った。例えば、ビエンチャン市内で運行しているバスの中に緑色のバスがある。JICA が購入したため、車体に日本の国旗が入っている。こうした目に見える支援と、実際にバスを運行するシステムやバスのメンテナンス、バス経営の収益性を高めて今後も継続的に事業が行えるような仕組みづくりなど、目に見えない支援を行っていた。目に見えない形の支援は時間も手間もかかるが、その分、相手国が習得できたときにはものすごい財産になる。JICA の支援は中長期的な視点に沿って取り組んでいるのが素晴らしいと思った。

ラオスで活躍する日本人を見てきて、みんな生き生きと活動している姿が印象的だった。その陰には、彼らを見守り続けている JICA の姿がある。また、今回出会った日本人は、教育、障害者支援、ゴミ処理、医療、森林保護と分野が多岐に渡る。それらをすべて受け止め、貢献したいと思った人を採用し、現地に送り出せる JICA は間口が広く、懐の深い組織だと思う。今回の研修を通して、「自分も将来何かの形で JICA とともに関わってみたいと感じた。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・名刺は必要だなと思いました。日本語・英語があつてなおかつ顔写真が入っているものがいいと思います。自分は準備できず、訪問先でアドレス交換をする際、面倒くさかったです。
- ・デング熱が流行っているとの情報から携帯用の蚊取り線香（電池式）を常に身につけていました。それでも蚊には刺されたので効果の程は分かりませんが、お守り代わりにはなと思います。
- ・一日は長い、休めるときにしっかり休むのが大事。特に夜はしっかり睡眠を取ることが大切です。けれど、その日の振り返りを書いたり、洗濯をしたりと夜も意外に忙しいものです。ですので、日直ノートや学びシート、振り返りシートなどは車での移動中などで記憶が新しいうちに書き留めておくことが必要だと思います。
- ・ラオスではどのホテルも Wi-Fi がありました。ですので、いざとなれば日本との連絡は取れます。ただ、せっかくラオスまで来たのですから、日本のことはできるだけ忘れて目の前にあるラオスを堪能してください。Wi-Fi の通信環境はホテルの部屋によりけりでした。繋がらないときは諦めてさっさと寝るか、ホテルから

の夜景を楽しむとか、振り返りノートを書くとかで自分は過ごしました。

- ・今年度は子どもたちとのふれあいはほとんどありませんでしたが、何かしら触れ合いの時間が持てるなら事前の準備をしっかりとしておくと思います。私はけん玉と一緒にやりましたが、数が少なく手持ち無沙汰の子もいました。子どもの数などはその場になってみないと分かりませんが、どうなっても対応できるようにしておくと思います。また、今回は出し物をする機会も一回しかありませんでした。ですが、いつどこでそれを披露するか分からないので、これも入念な準備をしておくと思います。
- ・事前にラオス語の勉強をしておくと思います。「こんにちは」、「ありがとう」は常に使いますし、ラオス語で挨拶するとラオスの人は喜んでくれます。それだけで相手の警戒心や心のハードルが低くなります。忙しいとは思いますが、頑張ってください。自分は向こうに行ってもなかなか覚えられず苦戦しました…。
- ・着替えはクリーニングできるタイミングもありますが、余り多く持っていかななくても良いと思いました。いざとなればTシャツぐらいはナイトマーケットで購入できます。
- ・雨具はカッパがあると便利です。カッパを靴の中に入れておけばいざというときにさっと取り出せますし、車内や建物内のエアコンが効きすぎて寒いときには防寒着としても使えます。靴はスニーカーでも良いです。今回は余り山の中に入ったり、未舗装の道を歩いたりすることはなかったです。ただ、撥水処理ぐらいはしておくといいかもしれません。
- ・胃腸薬や頭痛薬、酔い止め、下痢止めの薬は常に携帯しておくと思います。車酔いや、刺激物をいきなり食べたせいでお腹の調子が悪いときなどに重宝します。やはり非日常の生活を送るのでそれなりの緊張感があり、気づかぬうちに無理をしている場面もあります。それが体調を崩す原因にもなりますので、体調管理は自分でしっかり行ってください。
- ・雨期と言っても晴れるときはあります。太陽が出ると急に暑くなります。こまめな水分補給となるべく日陰を選ぶなどして熱中症に気をつけて下さい。
- ・水（ミネラルウォーター）はどこかを訪問するたびにもらえました。なので、食事の際にはなるべくもっていき、そこで飲むと無駄にはならないかなと思います。
- ・不測の事態で食事が食べられないときもあります。アメなどを持っていき、いざという時はみんなでそれをシェアして食べると良いと思います。余ったら、JICAの職員さんのお土産に入れても良いので。
- ・食事は本当に美味しい物ばかりなので、日本から持っていった非常食（みそ汁、カロリーメイトなど）は全く食べませんでした。ただ、いざという時のために少し持っていくのが賢いと思います。
- ・常時持つバッグは2種類あるといいと思いました。一つはちょっと大きめのもの。これにカッパや非常食、常備薬などを入れておく。もう一つはマナビノオトや貴重品が入るぐらいの小さなもの。ちょっと大きめのバッグはいざとなれば車内に置けます。そうなれば、小さなバッグだけで行動することができ、フットワークも軽くなります。
- ・海外での研修は限られた時間でさまざまな場所を見学します。ですので、何事にも積極的に取り組みましょう。「やらない」、「しない」はもったいないです。この経験を一生の物にするためにも、現地の人に積極的に話しかけ、インタビューをし、写真をとりましょう。チャンスは逃すと二度と返ってきません。
- ・カメラはいつでも取り出せるようにしておくと思います。シャッターチャンスは一瞬です。それを逃してばかりではもっていった甲斐がありません。そして「おやっ?」、「あれ?」と思った物はすぐに写してしまい

ましょう。ただし、人を撮る場合は必ず許可を取ってください。

- ・買い物時間は限られています。これと思った物はドンドン買っていいと思います。値段交渉も大事ですが、あまりそこにこだわってしまうのも時間の無駄です。日本円に換算すればそれほどの差はないと思います。ビエンチャンよりルアンプラバンの方が安かった印象があります。飛行機移動があるとあまり重い物は買いたくないですが、軽そうな物なら買っておきましょう。
- ・現地の人へのインタビューなどは聞きたい項目を絞り、簡潔に問えて、簡潔に答えられるものを用意すると良いです。ラオスの識字率はすごく良いわけではありません。文字が書けない方もいます。文字を介さない回答方法が、後から集計するときにも楽ですしね。

6. その他全般を通じての感想・意見など

本当に楽しい時間を過ごせました。訪問先では、通常の旅行では全く見られない地元の人々の世界を味わうことができました。その分、時間を有効に使ってもっといろいろなことを見聞きすれば良かったと思います。そういう意味では自分にはまだ積極性が足りなかったのかなと後悔しています。ラオスの人々の暮らしに多少ノスタルジックな雰囲気を感じますが、それはラオスの人々が醸し出す温かな眼差しと素直な心が国全体を包み込んでいるからではないかと思いました。ラオス滞在最後の日、これほど名残惜しいと思った国はかつてありませんでした。できることなら、何年か何十年か後、もう一度ラオスの地を踏み、変化の様子をこの目で見たいと思いました。それだけ魅力的な国でした。

また、今回の研修を通してさまざまな人たちに会いました。この研修がなければ絶対に会わないような人たちです。その人たちから人生を前向きに生きることの素晴らしさ、目の前の人たちを支援するために自分の全力を懸けるひたむきさ、現地の人たちと同じ目線で一緒に取り組むことの大切さを実感しました。それを通して、「国際協力って何でもいいんだ。自分にやれることをやれるだけすることだ。」と感じました。

今回、研修に参加した仲間感謝します。年齢も地域も校種も異なる仲間は、このような機会であれば絶対に集えません。彼ら、彼女らと一緒に旅ができたことが自分の人生にとって宝になりました。同じ釜の飯を食い、一つ屋根の下に泊まり、同じ空気を吸った彼ら、彼女らとは何年経っても付き合っていきたい、そんなかけがえのない人になりました。ただ、唯一心残りなのは家庭の事情で一名参加できなかった仲間がいたことです。願わくば、いつか10人の仲間と一緒にラオスを旅してみたい、そう思いました。

以上